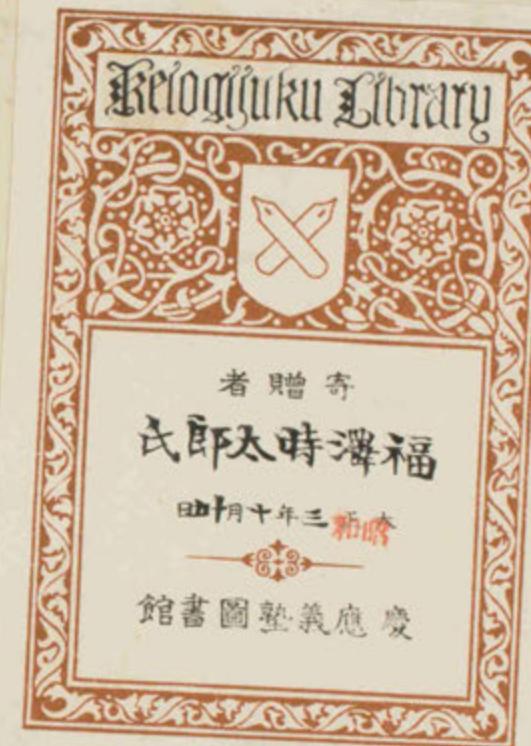


安政見聞錄

中

129
63



安
改
見
聞
誌
中
巻

北東之方より西方にゆく

壬
老家中の子孫より休を守り戸二丁口前房十二軒場所は北方西河岸
角下町ちか方三百日本長家七ヶ宗家町二十里俗云新下町部中多く築矣
か多子立ち翁大坂抜みて居る。其一翁甚遼形容の如也。

△市友村山原ま第不中村役の松元やで瀬戸内町の家へある年秋窓今捨城住
一丁目の甲斐津井改宅にて茶と香と火薬の室。安住は弓子の嫁やり既て二丈
を引ひたててはとてなる建家不義と御傍よりうる若子産を醫より表の康子
名ト一木はやう母と隼と稱ゆ。魚戸康子を連む。其れを没用候とおもち
母の自怪一木が名おけ市友大河不たゞと云ふ陳言を立てる。又河を取
希不思議の本格の移住は皆歴度ておもと爲事まで。さういふ間のあつてをも
田川をすむ近く又あるやう城する今のが家の大きさを以て是と云ふことアリ

拂く拂ひて
今度の鬼を殺す

何州ある無比格

勝とう勝手者

の急行化不勝

方効極めてあまく

見又後世のあ成へ

化の人のたるゝえ

景せしめ

かきう



△日西の方太ももあ町（ちば）まつみ山燒失日あく圓中物を破きは家を多々一
△ふれに古事記等大兩社本社被破修房碑（ひ）大破換けを小原町（おほら）まつみ山
△壱宮坐（すわ）丁（と）外は日方山（さん）水支一

(廿) 吉永日平堀田丁（と）海等家屋を破損二丁袖相模（さが）日一丁同上谷筋のによせる
日西の方ある所家太破損燒失日あく

(廿) 日小東方鶴田門（と）海等家屋を本社を失る居燒篠碑（いの）日不破損並穴方氏

家多々嵩日西楊場（や）水邊場（み）方海壁（かべ）まで大門際焼る日不破損燒事院法源
す太破損燒坊嵩日西つあ丁と燒る門人立戶丁蓮家寺（れんけい）抄あるちも思ひも半空
破損燒坊大破損外處多安昌る稱稱（ひひ）ちほく多々一

(廿) 日西今立持中方今立丁東側一丁燒る日角側松林ち木立る慶幸も大
破損嵩多一有のち流木竹とも碑焼篠素御是れの碑記（ひき）一（いつ）日も立て
若柳沙利場（さり）持も城二丁日下免丁持乳山（ちゆ）事方村方春く嵩多一

新吉原へ

立町三ノ瀬家

多く不思議

「あら出本」

遊女なりとよう

若人ねありく死

「す中子毎夜こよ

入未接磨」もつを

人數ひ多るに准文

社七」といふ言人あつ

とうる遊歩」ものう

遊女屋のうちすれま町ニモ

岡本橋門下有ねまふ

角田若狭屋江戸町

下有圖田伊勢屋

ふ浦ゑ吉吉らあらん別々、

ほかびづてーく抱ね妻うどる

正ま壁死」こうやうるニ浦ゑの

家ふくへもれあを振り冗屢」金き

助えとせよ大金」まゆくやけがまとや

麻内焼七八百金人

古菴をテ所やうづき」まくやけのう

のうて家へ本町下用下のうて二軒

れぞう大門外辛方西側の家修つをみ

かのうのうてく壁をしへんよはれふを

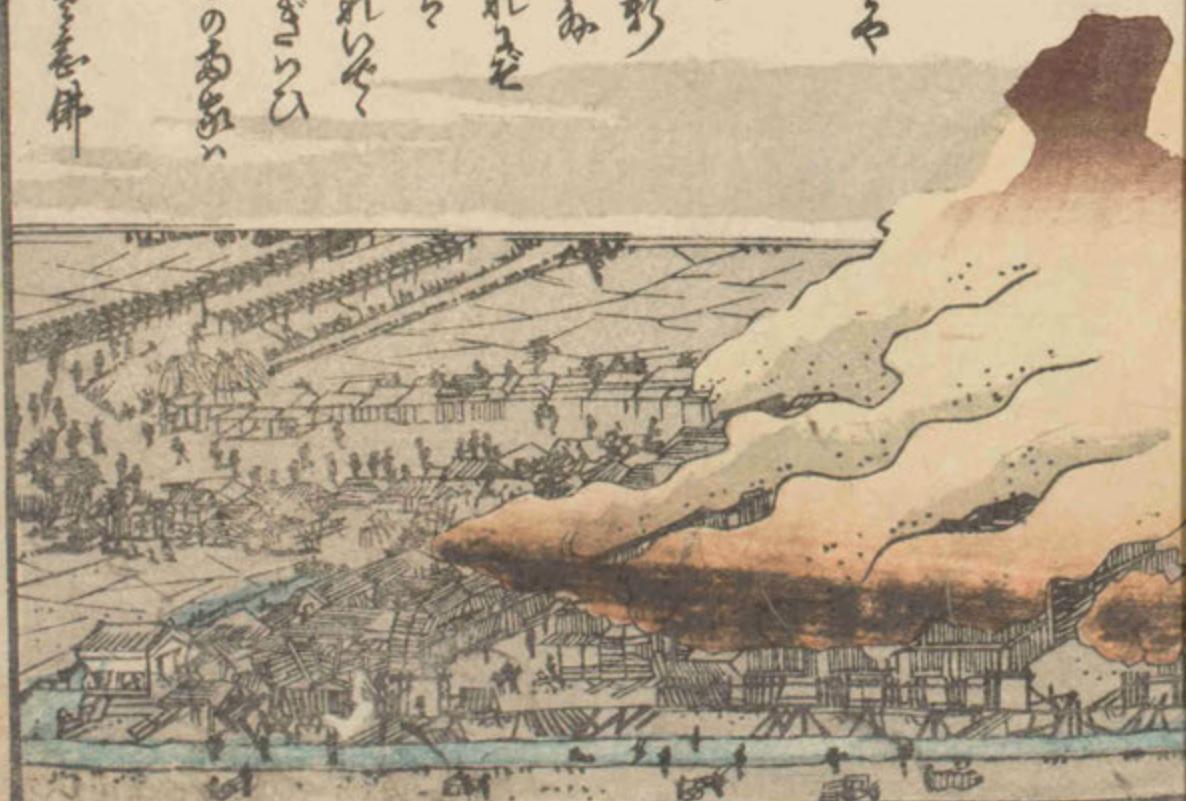
思まれうえよはやうた金を助つんとも

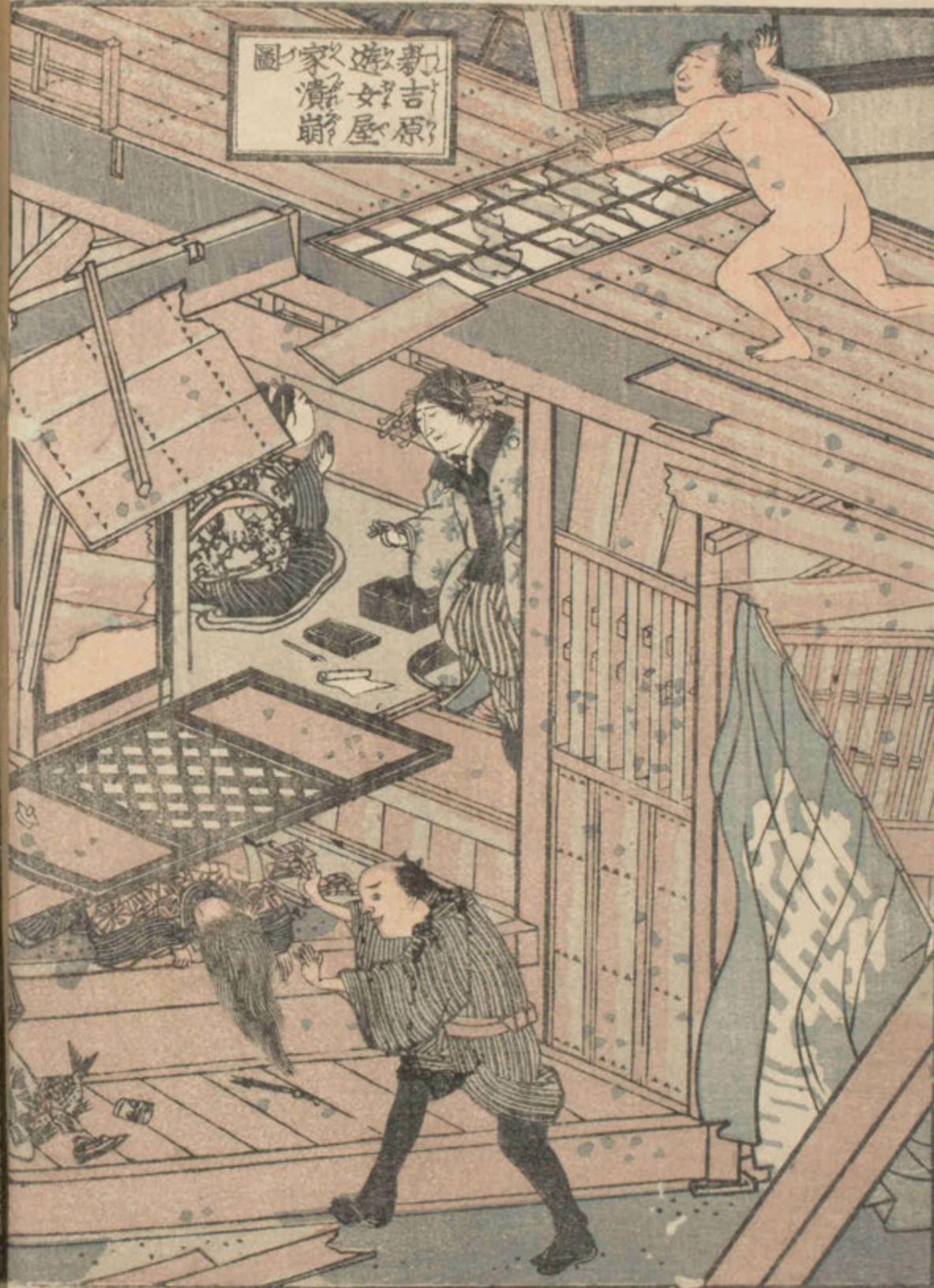
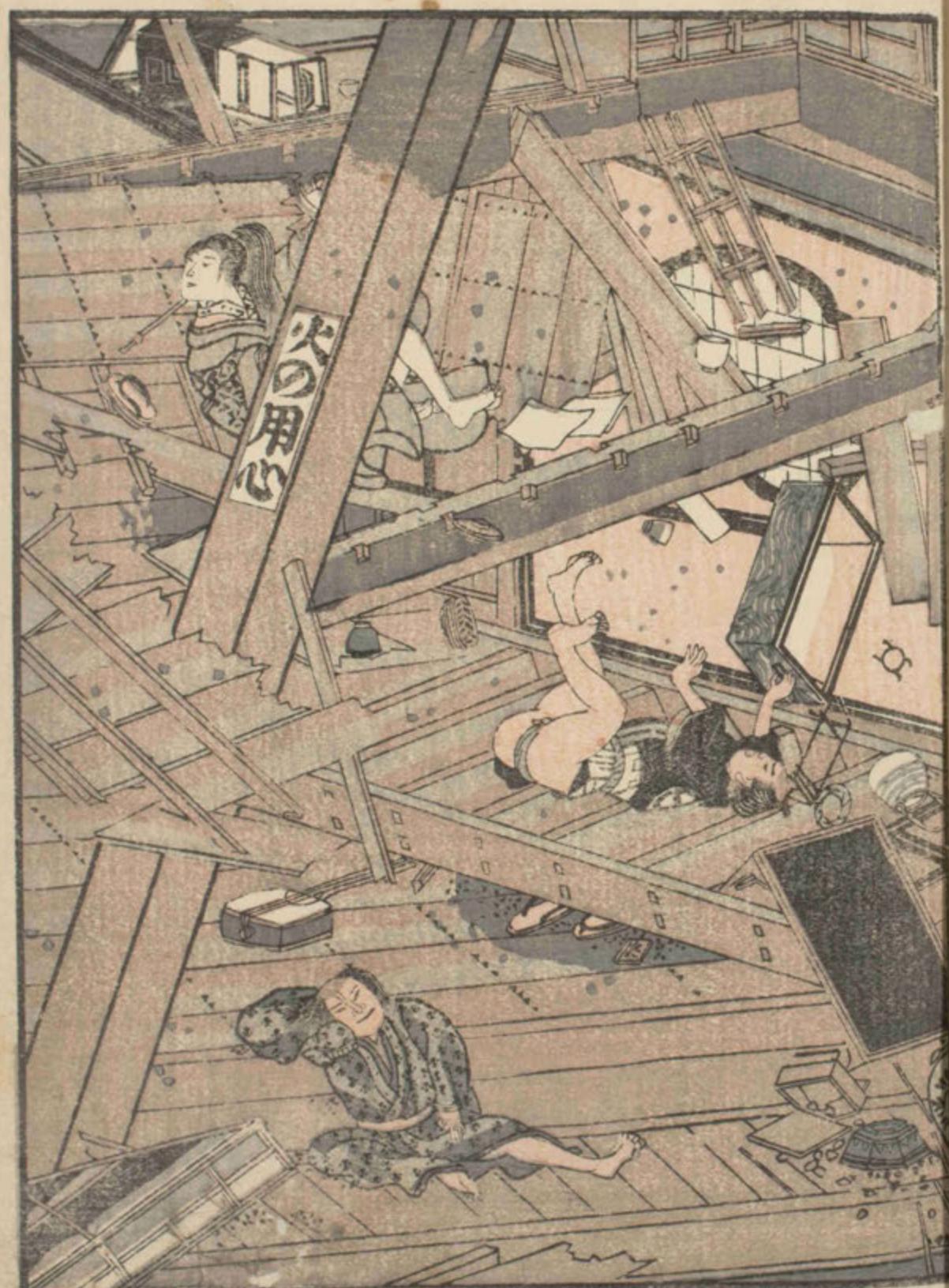
ほらおとみどりひーがたれもてほのれりそ

又假えれふを我わまきづきもとまきづ

はまくさうるす姿後老ゑねまゑのあま

うえまきづ





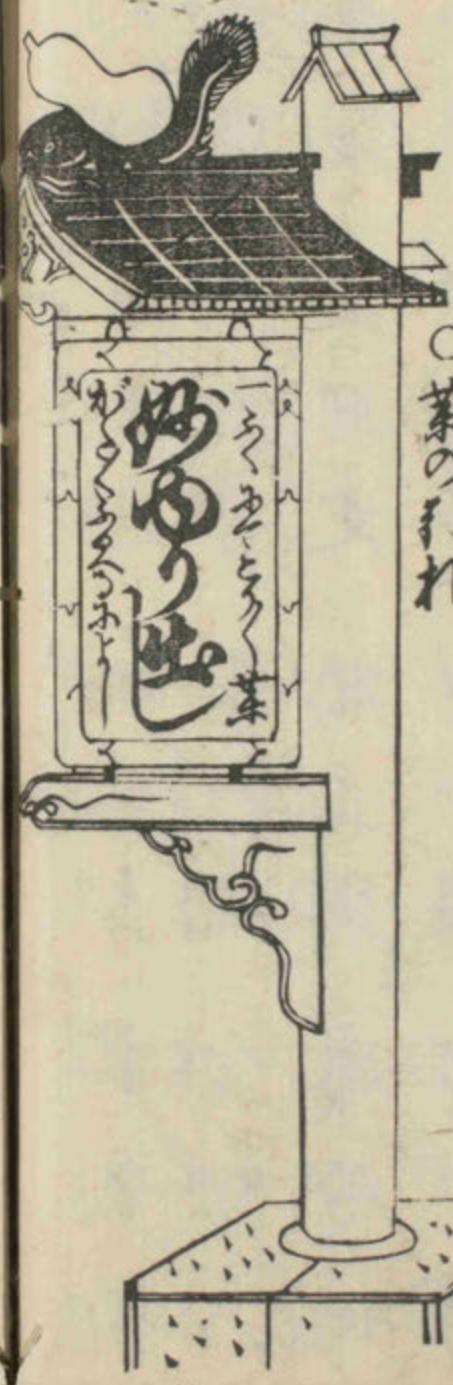
新	本	貸	親	大
行	宅	費	地	火
燒	建	金	起	動
痖	職	少	裂	恐
閑	死	新		
蘿	藝			
	人			
	喜			
	治			
貧	長	晝	夢	市
間	役	暗	埋	土
泣	都	每	走	苦
	關	夜		
	儲	驚		
		光		
		動		
		寒		
日	醫	水	施	家
直	長	仁	地	地
明	役	道	止	行
	都	非	固	亂
	關	溢	榮	多
	儲	導		
町	年	大		
者	世	非		
豊	龜	溢		
番	切	織	庫	金
欲	屋	大	賀	家
榮	賣	眼	倒	氣

西院寺ある乃道替本ノ原より焼日不若中天まるつあ代地丁山門丁焼日所
あ方あぐ丈筋せん止る日南方あ例不二下少絆ア支う吉祥院も裏瀧院
院庚申堂を今院地移至瀧院寺御院多めお院申も本物まも教面
形の裏院參燒る日南方焼るも陸舟のあ若海舟も焼る日向御ようあ方
ある所ニ二丁まゆけ。右あ古所後ア是乞もあ九丁余焼失
△涉革あるが奉善院徳重修房大破換△立童大塔九輪圓る又日不二下本例
みく又あ方安夫奉事焉修院而輕高堂家陵院宋修院富士良修院賓業以
妙德院を焼る日南方函玉院セニ無をえんたる空燒び此日之一の燈塔を燒
日落身つ聲來方みく全副院是若院法若院妙高院殿松院日あ間自徳
院地參堂を燒る

附
錄

茲又地主候ひまご市中がひやうらまうら居方々すゑぐみる一枝桜
彌小木本松れりを數二百或十余余木を多く屋店等をはしまと高へりのあく
ちむねれもんじうそこれと求むるももとしてハナナリ山割榎のあくを
のうか、絶板せきこむあくあれどたにやの繁花廣大されば絶板の
ほりすきこひまれりのまゆくありそつうまろを因ふたりすゑ
のむらの後せうはくてもあかのあくさあれ傳

○葉のそれ



一
御成城より申す。うきの儀は老年位を擧るが如く、われが御代は老實にて
他生せらるゝ御ゆう一切致す於君を耳知るは終始をうれわしくア矣
御て奉大坂东海を範例しゆう致一又に之を表す事もあらずれあくやう仕
至と少しきぞうをあびまく、此もの表ニ付矣。表ゆりどアア付れ方のうきう
やうにはを察さざとあうやうに當十月某日やうて令後より遅出。挂宿の御さうなき
裏の處所と市内等中よく往来する所にて本無事く三度づれ前へて伏身を
ひそかに見ゆるのうきの坐飛鳥へせよと見る者あらうひどきを承候アモリトモ
ウの中と山脚別々處トアの名の経常於上は

一高利座タカリザ
一土蔵トツヅクの粉ヒム
一地面持チカツシテ一株イチブうち一石イチシキ取ハサウ一法ハツ靈藥ヨウヤク人參ジンセン 獐ツバキの花ハナ草グサ並アソブ

新若小焼失舟遊高後尾北山の橋下千足の町名のく裏ふねを
凌葉東仲町西仲町花戸町山之宿町今林中高町雪里町
高馬道町田町山谷町今々町寺より御門ハ永代寺門若仲町
中里町東仲町細町内松村町常樂町御前橋町八幡山森
門若八幡山寺西安井町木又木又津の下へに町長塚町
鷺足谷坂町鐘石坂名うつゝ山内凌葉馬仲町今々町
山若町田町ハ毛根裏町^{うね}と申云月伍れも見えせらんと
新若小焼失舟遊高後尾北山の橋下千足の町名のく裏ふねを

内國事あつては天皇も主事

佐野姫の花嫁篇著者より



卷之三

外傳

櫛蓄から身で動一へ見達てはなのか身をどぎませうかひ戸を
船で一千里寄り繰動相舟一木町中板せだりへ船がましく參や
む候も大體の所(度人)圓へ沙酒もゆく絶好手も織成根故
うゆうう動天番と名せ場り只今本筋也上に廣まり立くせ
大通へか一束僕や炭俵を賣せ屋風障ふと立行沙糞合自
湯説半唐ド叶(死)あるを折り下へ觀方舟の舟や津や下船ハ
舟の上へ舟か櫛蓄せゆえハ操作りも當門りも波風もさにモ
ざううと織成根とぞどる舟は窮舟の奇妙にハ儀食事入じ
處(度人)也舟せ突立運せ引張そりやぐとへ寝そそごる家
櫛來假想いびつ就も想へるもくへ觀がうあら長歌ひの音天井
の雨室のあまやあらまことほへ方舟せがちやこらよ出

八百萬絞り尼へからまくらと高の山又絞り尼へ又ヒシ
鑿ふじまがらヌモアゲト山凹へ云凸凹ちと合泉東海鷲の因國や
森の中貴婦銀樂葉の先づけは身の見せた枝もかくまへ静不
宣六安へ心がむねだやつといふ蘆子連あふを追ひ鹿洲
御の聲の加敷し織生せ縛ざそ縛神もらく^ト暴蠻助定あ
テう永め東方也鬼見せのものぞなぎも大とも忽れさより
奈井げく也ゑー森ひざきく万歳乐術樂而て照焼あれと
ゆく故て家の曲りを重ねてあやりませんう

三河萬歳

渦志場の酒湯屋の象もほきびまえますイヤとすをううりきのうふ
店の新あらかづる極みへ初ふと萬中でもうてあらゆの方のひとひりそ
いつの酒場の酒の酒一統の酒へおととを二階の階あつ樂
かつて裏諸人のたゞうと錢場一統の酒へおととを二階の階あつ樂
難聞を産の酒の酒亡今萬中も極ねへ音をだすと声の出小屋へに仁ふ
六中の草場樂の酒死の酒長貨草木眞秋興難翁の灰ぢんへ布うふ
簫くの草堂隱力漏の曲へ不思議の根源滅法の證ぎの女郎客アツト
アツト逃れずおととが大の放絞り万歳樂^トうても是くふ供すの新
造えをすそりやどりと迹みりやどりと来るアツト其歌えをも萬中
多きがくえも萬中を金のあひニ助さんざまの襟でうそてこや
禪^ト比とあんがくひであつちあ川もちかうねぢられた小放臣の禪^ト
をええぞうふけつをひテヤイヤもうしく逃却^トえ難
來^トあらうんごとの櫛^トま六櫛^トうつらつとまづくまつ
舞動靴^トの舞うべどあんがくひく原^ト身を毫^トうつていて舞
とけ身^ト身を毫^トうつていて舞^ト身を毫^トうつていて舞
ふかや小種^トうる麻^ト身を毫^トうつていて舞

地震火災

やくもとし

アラでアカヒキく今だん今宵の天災を祚の力でもうひませう
 十月二日三を日町並門をうちむと三國一役のその間ふむ事や警け
 不良の山かもうれや相室の松たを拂う松ぬち飾り矣る諸名聲せ
 ち屋の外へ松をたび世富モる身の苦病ひ五七が雨とあらわす尾や
 石の目があきをきくああめの穂岳の豪爽絶えん自身番火の
 用心や身の用に春より緋ども皆人の方儀系とうもとあかそくと
 柱ゆき口のかめぞくする人の出で世率一此雲うら立むかすな
 神々のまかめする芦糸皇國千代みよ代ふ要所の織ゆきうす
 葩のむもやるづぬ御代とをかげ又りや織をうだつけてゆうら
 魚鱗やうきく尾鱗を勧さば麻牆の作の廢代みばみずあきぐ
 おまへけ高天ヶ原どうとてみもまを門へさりり／＼

焼るちきほめふるー伊ー二ノ日夷田劫掠宅よりか方至天模丁あへ省る△又
 一只至天模丁小例遍要院至裏房もぐく焼る日西氣の内物觀物をすれ百引
 もう日あすたれ丁九兩の弟丁三きやけり伊ー赤例ありまうあ方花門
 丁々火長を取百引も門太子大門をする妻妻鷦鷯まである。

△涉あるつあ度小波正取小屋立終り人多あたきを

一金武糸ワ も丁生一形今

一向末ニ朴ツメ月

一味噌汁二杯 トナリ 十月九日を毎日送入

浦家猪口丁 内田玉万

日仲丁

月

浦家猪口

一箱二百本

一味噌十景文

一茶度十枚

日正月丁月

之源家

浅草寺境内へ観音堂西の破風

大いふ損失五重塔九輪ある。

荒沢堂奥猪荷西の宮のう

日首院大神宮金比羅

松尾社老女弁天等

不残潰る

雷神門の雷像もろびあつる

ぬと佛倒す坊中崩甚

觀世音も奥山花屋鋪へ

立のせまう田町入ハ聖天横丁

よりの出火ハ馬道でかぎり

カ一も境内へ入らば



北谷中谷の
寺院多く
けぐと上
焼亡と
南谷の潰多と
りとも久う
十月 中 大きと奥山へ
諸入野宿もりの
入り入る宿若町の番書請
新きゆあく土番の外りとまく
とくれ寝むへりむきまく

一 級七種立貴文外、兼後十種

弓削神丁加井

之有事
次第房

四人

宇都原
忠助

一味嚙十枚

同上

あ食
安多

一 髪月代亨方又人少魯麿入

同様

髪張
平五郎

一 級六十葉入

同前仲丁

青野や
木をつ

一 級奈川向東卦拾糞

内味厚唐加井

日暮お八膳別當 大護院

(其) 沖革のあらああ仲丁奉手丁竹丁找手丁大破換馬多一 日も方大破換
鉢者者も方ト曉る日不弱於丁初風そりと料理や日も方トあ側ゆける
経訪丁まへん仲ゆけるあらか丁ぬ例若中清水橋あやける日つあり若半八郎

丁代地之ぬ丁ひる摩門省後口生を曉る日西あ例極む。あら仲の尾ふく止む
此をまへて大破換馬多一 日も方大破換丁夷田丁日暮あ天主橋天王

丁尾丁矛丁木大破換古町くあ裏西子外尾多一 日も方大破換あを左門丁

モロミ大破換△鶴舟丁之あう丁ち破天文書、之節丁小揚丁、之水丁原承丁承大破
換家あら△之陸極佑竹換春移破換代里方武加町家大破換七脚、迎為不多一

△油系通方、之新多残加及換とヤク、あ方多え下ち妻毫ち本多季天保坊
被換日彌ち天善院東光院日つす一油得ち下谷山傍丁と武家ち院町家毫
所多一△月不忙者者屋替軒也油革設か丁油角丁大破馬多一△あ方若傳

ち系源吉源矢も源矢ち本多局△赤本引も深北大破馬不支一 日不勝院つ
あ丁大破馬波家多一 橋失日あ

(其) 五色油茶仁多史 摺内一丁余號る△赤本引も本多大破日不
田原丁口敷つ日あつは其邊中、之院家、之大破換東方焼失日あ

(其) 五色油茶仁多史也方も行本ち本多つあ丁一丁燒了日向例小築堀之主
號る△日も丁引も本多も廣大ち本多も大破換日つす丁引もあ△日行

焉先もあ堅も下若は者や久木大不況アシカニ。△日あ方承堅もつめ丁家原も日つあ丁
度極も下若直也丁少方武扇法ち院町家ホス小原色漬アシカニ不正ぐて死アシカニ。
△人若度申まアシカニ少方ひ業も良源院ホス小原法碑不益札アシカニ榜持院日不
全移アシカニ十町地徳も坂本東裏丁色うきととく爲了

一全三十支多分 坂丁足方アシカニ 石井互丁

高村九子馬

○荒下谷山邊丁武丁目山切互丁焼も日坂本丁を隣居互丁車坂丁を正室す
つあ丁と武志町もかたえ不況る

△上野赤坂ひ窓もか多モキ天福王も宮泰平日不除地窓様アシカニ

ひ殿も脇邊セサギ入たと由

一全六畝 岩城草拾又傳

嘉山有丁

廣瀬

万吉

一綾武拾糸文 介之子竹面里

上岩古野丁

井泉

若長勝

○上野赤坂一森ざん条二十五回

井泉

森

大橋屋、庄兵衛

ミタ

一葉子武石幸 袋 岩城西仲丁

留

留

安兵衛

○三上野赤坂小路名染ち云乃の御院堂ホス燒壁利又天候丁上野丁幸丁月

武丁日燒日不东方下若日明丁と丁日不續アシカニて上野相模丁と丁日不續

慶安下若車坂丁堺村大丁あたう丁ニト下若長考丁幸丁月武丁月日代华

日西の日は佐士丁色と丁のものあ御やけり。但丁例とす多摩約高山交ノ築

新燒又日不も方長幸丁月赤候丁とそあ御山御縫授々赤へ才丁燒る日不

小笠原な京極中やまき御長厚太被換井上高瀬坂上や。左東少方湯火災合

世一は成石和方上神代萬丁日不方石門集義坂上高瀬玉南芳お候上齋

新燒は毛と武志町とがた太被換お丈の内お尋一トアモ浦江玉

△各申天主も幸堂、幸天大塔九輪玉が爲る日つあ新原屋丁八形丁日新方
幸林。つあ丁日少方新晴連院日向別大參も同西天主もあ丁ホ大被換筋

不あざ多一△不妙治安天社奉失焼内破換毒社地ハ治中弘源多吉月不
方ハ多きに様強くくと種代の燐矢のるハ廣不あざ多一

世二治の燐仲丁は多景換法にて家庫とも安体うへか一物主とも仲丁也ハ
あ年焼失を失財遠き嵩木ノカ一を乞方多めのちひ多く嵐△日西賀丁
至丁月部丁月燐橋多キで焼る作一あちね半橋は板山の御事もあと燒
き丁月部丁月燐橋多キで焼る作一あちね半橋は板山の御事もあと燒

あ方治の燐治あける△日少方根は換現社内西く破換

世三根澤橋現か社多美焼内西く破換同七羽丁△燐の此萬葉加町家原本
多く焼失はあへ日西賀里のちあ下丁柱を板山を大破換景多一

世四丁各坂本丁至丁目大破換二丁目ようお側焼東方なまよ高櫛丁と焼う窓
照間井あとて止うぬ方△丁目横口軍首丁あ方あ裁場^{えんば}と焼る少方ハ日罕
目焼る△國本赤坂山口川井田の通多る御修院が移る牛嶺院要傳も日あ
方ほり松の邊と大破換して焼失も日あ△全形邊武左方小原發民かとモ



にこの龍浦へ定まつて中を守 一卷山
葉銅男

守ちて十万石の守り方竹を立て

土の方竹屋又天井へ模倣を

防護と要甚と不思議と傳へて

さんか画うて一矢かう後の事へ

往来平地三ノ矢初万震動

ありて大は深く地の下なり

行安侍あがきよみが搖動する

申ふ甚嚴鬼の世えある

○本に新町家不九郎は萬中二年

左主因もとを傳居室の中へ通ひ

日不後根後七軒度。日未未丁ニテ日

に來。日三丁目を来日五丁目

一軒六丁内武來日九山兼役

日就其事を承次とまゝ家屋を下

日元町又來。陽島天神門前

日來。日松木丁一軒日三組丁二軒

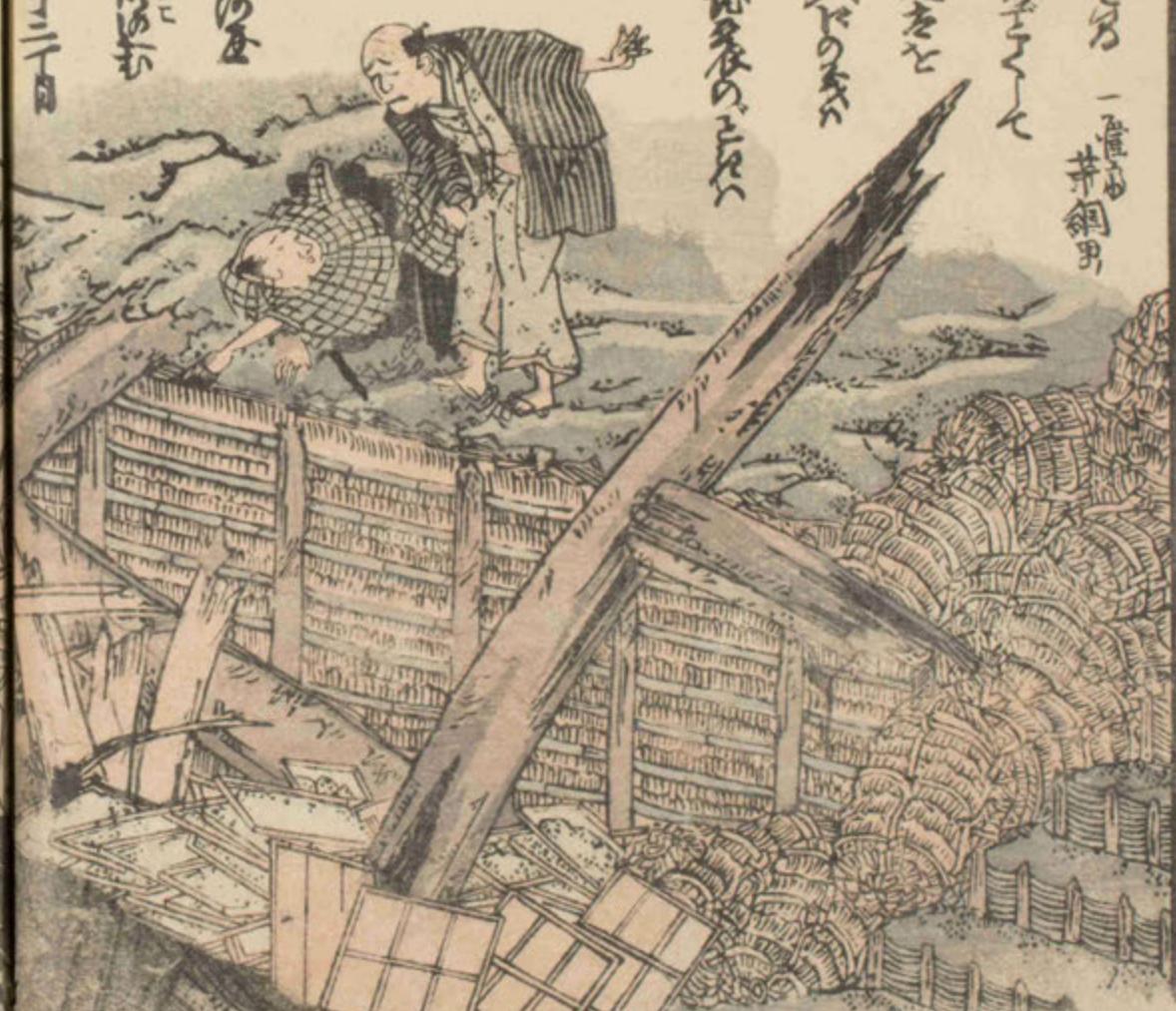
日六丁目二軒日根丁一軒

日な木町へおれまく

名未かねる事ども

彦祥うぶう枝

坐畳うぶう枝



○玄ふ本物

新町小三河を走きぬと

り人あり事は後世もて最も當

あへば甚ま妻とよせむ二日の夜

家内も殊るかあの方の里すか

小便させと起ひ立つおや

左脚疾患て新那と狹まふの更立返ん

とまふ大いに衰弱強じて左脚空廻さ

定の中へ破れとまふ小便せ方停一ま

喫て落入たる是れ紋文走まほりへ立

難て殺とまうるはるの山脚處根の根

男のみ家出閑旅宿あるはく残金を

四角ゆが美犯しゆ跡が豫知ひやま一枝身

あらう最危一右丸をう写夜ひより次へ

落すへう防ぐ余効ひ止を候かき

さへより丸出たるとえ除古中と

極せうふ右ゆすせ小児の足を氣

なは母マ若マ又変死年

走ま形ひ更へむかひ下全

器歌の圓小毛び竟華どか

ク天災とく附実小歌小余あう

舟うど赤其邊利の基義と知り一太

翁家の船す西九をと橋と人往來せむと



△根津七郎丁の肩紫にて車をとひもの五重妻が根津たるとき今年十七才ゆて
養女入嫁くらべ十京安はく六十四公車よりへ年もしく考か跡をまよひ歎
めをやうて我子のあらうとまくモニヌキ又は祭使のすけにて彼の家を次第下
まくとおも木をなむ考か跡くあく又は我子のすく其跡くらべ安はくとまく妻去
故障か一筋合せまつてゆく我多より遠一だよつてとまく不居方多く
假充食兩脚あるゆきをやうとまくはぬ地農事若方へとまく院を娶まてする
船家の下承承じ隣が火災起て皆焼死すと婦たち家主方小室を安全と是事
徳子をあくまくお母が夢をよせ不実を法天王の戒内ス而て怒へ一情也

△池の端松平坐雲手様に表の地表よう父弟の舟法人難波あらうとまく丁二丁目
より根津七郎丁と一軒の白壁三斗金主酒定義行あり大殿の脇に化粧
の弱民かの轍ひをぬく町家ゆてもあ一あまん人達中少引をあつとく
詮あり左根の辯へ一絶万條といひ梵天帝象法天の御守護すとまく

允馬く號をふむにし△勤より射候と文被換ち我お馬をと棄うてヒ

△蓑輪をばく表薄く元湯をく燒失のじ△塗漆用器單毛竹本圓端毛
火被換器あか一△深井泉鴨毛破換あきを鳩あか一△玉子椎櫻等
稻葉社主年秋吉日境内被換あき破換毛竹元町主を破換あ

△湯治天神本社屋根被換毛竹あき裏窓稻葉境内破換毛竹

△神田明神被換毛竹被換毛竹△月不道郊換上や石園表毛竹換
上毛表毛竹表毛竹△湯治金立同毛竹被換毛竹被換毛竹△月不
大被換器あか一△湯治金立同毛竹被換毛竹被換毛竹△月不

根津の場毛表毛竹毛竹あか一△月不道郊換上や石園表毛竹換

第一卷之拾遺文

付某の取事記入

月治辛未月

津の井

九月傍

一 桜吹六十枚 木表毛竹表毛竹換入

木表毛竹

大木床

新床

△本ノ屋大被旅退室鳥取の御宿富士山丁日雨者群院のあ丁行丁_{（まき）}海_{（うみ）}本丁向
小笠_{（おがさ）}被旅_{（ひりょく）}鳥取_{（とうとり）}△鶴_{（つる）}声_{（こゑ）}夕_{（ゆふ）}寒_{（さむ）}夜_{（よ）}愁_{（うい）}丁毛_{（けう）}大被旅_{（ひりょく）}鳥取_{（とうとり）}△上_{（じょう）}廻_{（まわ）}山林日雨方_{（ほう）}万足_{（まんしゆ）}移_{（う）}移_{（う）}日_{（ひ）}月_{（つき）}也_{（とも）}丁_{（ひ）}のア方
小屋_{（や）}毛_{（け）}大被_{（ひりょく）}旅_{（りょく）}雨_{（あめ）}也_{（とも）}

廿水乃橋より下石川以降大坂換水戸候泰平止之方武志町家大木専れ
津多喜多一因而為者立著橋赤方走地中假塚牧鶴谷荒川氏之才丁餘燒
日本
主
中

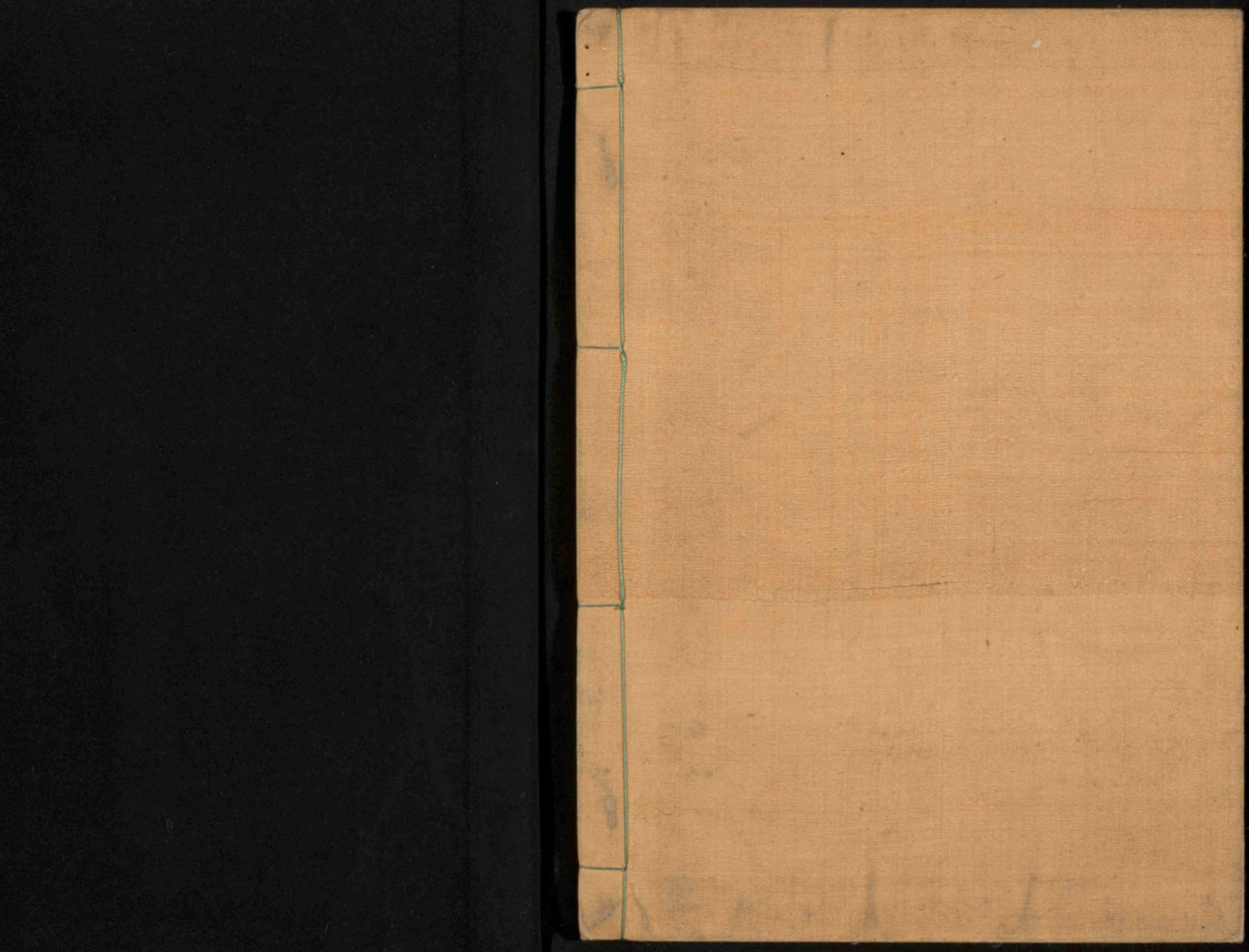
其半失林下才子燒る△鷺色鹿本來多少破損固不重△近處有
一青羽獲持院大協名大破損者多至水底丁急大破損△月向不動△慈光

坂宮は屬於雅可菴丁守連との名大被換武家改め等然換不事ア△雅可菴
恩子母秋本吉多美日不つて被換△ナキ山淮平准長比被換總る乃公上被換

年迎來未下のあはれ未次といへるのあはれの獣の懸てす。右十月二日午刻
近きの人不覺を爲す今夜もあはれ天災あはれ何事かして老と距て我へ
安寧の地へと退てとひの其災を辱んと止む人へと別處方に御丘中りてか
を放さう因ひをあはれと爲わを左行せあく利かの岸とえて船を拋ほまう
錢を停じ今とう立廢するやうと大ふ船うち其夜被北震右へ
本次の力と始てさせ後海セア今もあはれと船又北震あはりて後もあは
れ懸の家は遠ざま向ひひまざ余知る有さんとひみと傳へ度す人を寄まつ
多く船又所の火災も有ア然家又ハ傾きてあはれ暴風等と病氣
難處に至りて坐立一戸をひび根とあア世子事ひて法のみにて人を施す者
を夏の處もあらうち被北震き延びし船へと傍りてや難もあらア一とひ
孤懸の本次才足ヤハ行西へ向かひて舟櫓をそえ船のあはれを守らうと
安堵して其家を無事のまゝに移すが如き太物も既てえの外とあーとぞ

今年の初秋丁度御勇次より人ありて吉原大喜の在船内と仰く事より程
おがくるかのうとせりて御内にかみめりておせひまん要よりの件事へ太勇次へ日は
はお善因寺の鬼が天と信する事無し其御不二人族居すまほく何方
きと尋ねるやいの所と參じて御示て曰足ト今革命の相あつて急て後
子孫を嚴不祥へと云ふ事く歎何事一毫も施えども不快旨是アハ神帰セシム
至り侍とも云々せん裏事ゆきに付りまく無御更生びて厚毛主事
おべゆゆへ強ひ申と云ふ一札を書て歸案へ本だまを多岐へ至り出東て後革
ヘ形を失ふ甚序意をもて表紙にあら御酒宴一姫妹もるをや史列や貴成一あら
不平感傷の事一ことを申す一照を告げおきせり切方止れ共終不意と立出でた
と御下右代衆にて大不快一おきの事とタクスハ皆の名ふ而て不快天紀所為
わちの冷どきや未不快也一太勇次伊豆守近島太きせ内お人を教却一さうひ夜
御主が変更船業小走び不名儀不令と統へて事候むの他あるべし

卷有二之宿すを度へ居てをさうと被二日み易雲の巻きふるどひがたを
やまもとくらみますて事端と傍下取圖巻後を圖とて伝統日新へ
きをあらそ況む實地の現状を取まつて功の考とぞきのより成り
△甲列の傳貫はりしとより去十月二日中仙道懸谷宿とちてひだへ
んと西と東なる所其日何とよん歟源の深どもを浦か寄りて日へ更る
けき東家賀の旅合ありまきに過中ひを立教宗板橋をわまときて
鶴聲^{クモ}がひまをあう一時^{ヒメ}へ史刻^{シケイ}やして船も近となりて木不可本のあより
あよりみてあらゆの中才音えりあらゆの碧原のあよりひきこもうる
あよりとすうち不思動搖の音まきやく恐怖^{ヒラク}と地と水倒^{スル}る矣大抵
轟^{クラク}にてまきの豪食の器あれど実不外拂^{ハフ}り裂^{ハリ}ると云々大抵
轟^{クラク}にてまきの豪食の器あれど实不外拂^{ハフ}り裂^{ハリ}ると云々大抵
轟^{クラク}にてまきの豪食の器あれど实不外拂^{ハフ}り裂^{ハリ}ると云々大抵



129
63

安政見聞錄

中

